

プレスリリース

平成 28 年 12 月 1 日

独立行政法人国立科学博物館
国立大学法人 東京大学物性研究所
国立大学法人 愛媛大学

新種の鉱物を発見、Bunnoite（豊石）と命名

独立行政法人国立科学博物館（館長：林 良博）地学研究部と東京大学物性研究所、愛媛大学ミュージアムの研究者らのグループが、高知県いの町の山中から新種の鉱物を発見しました。発見された新種の鉱物は、地質標本館の館長を務めた豊 遙秋（ぶんの みちあき）博士の業績を称えて「Bunnoite（豊石：ぶんのせき）」と命名され、国際鉱物学連合の新鉱物・命名・分類委員会により新種として承認されました。

論文タイトル： Bunnoite, a new hydrous manganese aluminosilicate from Kamo Mountain, Kochi prefecture, Japan.

掲載誌： Mineralogy and Petrology, 110 巻, (2016), 917-926.
DOI 番号：10.1007/s00710-016-0454-2
URL： <http://link.springer.com/article/10.1007/s00710-016-0454-2>

著者： 浜根 大輔（東京大学物性研究所 技術専門職員）
門馬 綱一（国立科学博物館地学研究部 研究員）
宮脇 律郎（国立科学博物館地学研究部 部長）
皆川 鉄雄（愛媛大学ミュージアム研究員）

発見の経緯と命名の由来：

高知県の町の山中は黒瀬川帯という地質で構成されており、かつて鉄やマンガン鉱石を採掘した鉱山跡やその鉱石が山中に点在しています。その鉱石の中に見慣れない暗緑色の鉱物があることに気づき調査を進めたところ、マンガン・アルミニウム・ケイ素・酸素・水素という普遍的な元素を主成分としながらも、これまでに知られていない鉱物であることが判明しました。

この未知鉱物について東京大学物性研究所、国立科学博物館、愛媛大学が連携してデータを詳細に収集し、新規の結晶構造を有する新種として、その特徴が明らかにされました。国際鉱物学連合の新鉱物・命名・分類委員会へ新種の提案書を提出し、審査の結果、新種として承認されました。**Bunnoite** (豊石) の模式標本は国立科学博物館に保管されています(登録番号: NSM-M44106)。

新種「**Bunnoite** (豊石)」は地質標本館の館長を務めた豊遙秋 (ぶんの みちあき) 博士の業績を称えて命名されました。豊氏はこれまでに 6 種の新鉱物の発見に貢献し、また、永年にわたって鉱物標本に関するアーカイブ構築を行うと共に、その豊富な知識と経験を生かした埋蔵標本の救出活動に尽力されています。豊氏はこのような実績により 2015 年には日本鉱物科学会から表彰を受けています。

用語解説

国際鉱物学連合 (International Mineralogical Association: IMA)

38 カ国の鉱物学関連学会の合同により組織される国際連合。鉱物に関する国際連携を担っています。

新鉱物・命名・分類委員会 (Commission on New Minerals, Nomenclature and Classification)

国際鉱物学連合の中にある委員会の一つで、新種の鉱物について審査を行う委員会。新種の鉱物はこの委員会の審査を経て承認される必要があります。

添付資料 :

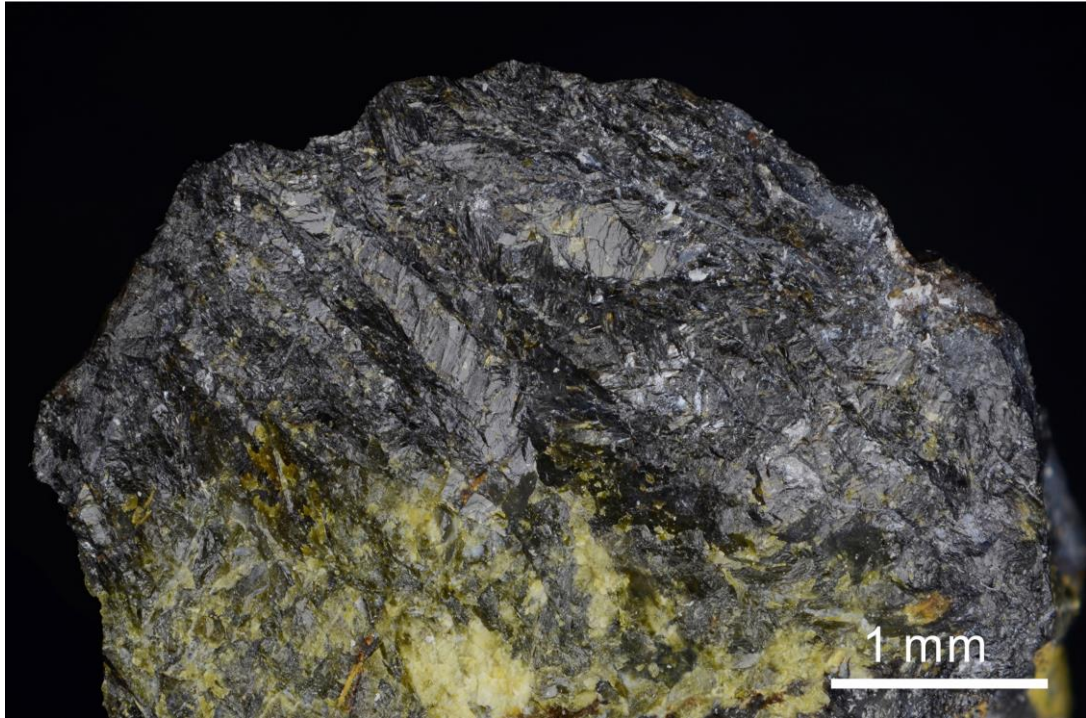


図 1. Bunnoite (豊石) 結晶の拡大写真。全体が豊石の結晶。右下の白線は実寸の 1 ミリの長さを示す。やや暗い緑色の結晶となり、化学組成は $\text{Mn}_6\text{AlSi}_6\text{O}_{18}(\text{OH})_3$ と表されます。

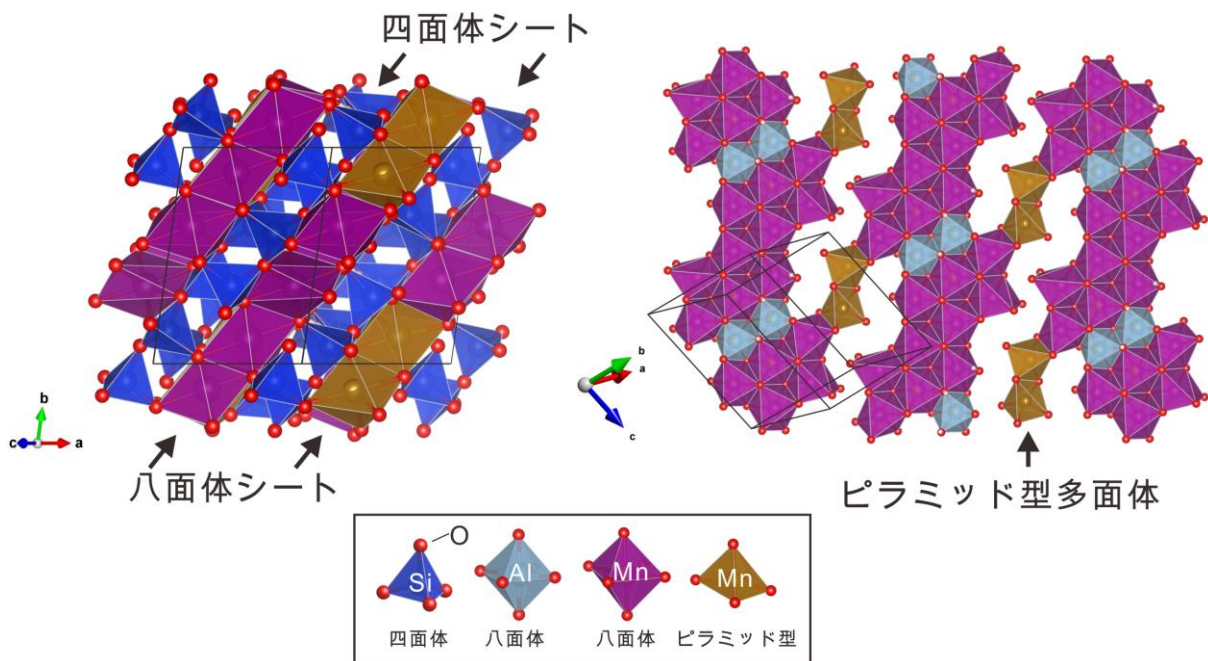


図 2. Bunnoite (豊石) 結晶構造。四面体と八面体を主としたシートが交互に重なり、八面体シート内ではピラミッド型の多面体がペアになって八面体で出来ている列をつないでいる、これまでにない新規の結晶構造となっています。